

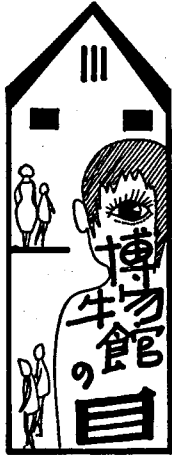
No. 57

1982.

1. 15

# 岐阜の博物館

〒501-32 関市小屋名  
(百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL(05752) 8-3111(代)  
振替 名古屋 37909



## 博物館の使命～地域に密着した調査研究を！

本誌「博物館の目」では、現実の博物館界に課せられた諸々の問題点等について、感想・意見・提言等をこれまでにも様々な面から述べてきた。47号では“博物館と調査研究”、53号では“軽視されがちな自然史分野”等がある。

ところで、去る昭和56年11月5日、「博物館法制定30周年記念式典」にご出席下さった皇太子殿下のおことばは、博物館への深いご理解と愛着に満ちたすばらしい内容でした。30年前の博物館界の実態に比べ、数の上では10倍以上にも進展したことをお喜びになるとともに、今後は博物館の質の向上、地道な調査研究活動を期待していると述べられました。その具体的な事例として、自然環境の急変にともなう外来生物の日本での繁殖を心配され、バラタナゴに置きかわりつつあるタイリクバラタナゴ(淡水魚)を事例に、日本在来種のバラタナゴについてさえ、その天然分布の実態・生態が調査されておらず何もわかっていないことを指摘されました。こうした地域地域に密着した基礎的な調査研究こそが、博物館ならではの、博物館の大切な仕事であると述べられました。我が国における自然

史科学の立遅れ、自然史系博物館自身の貧弱さの実体を鋭くつかれた自然史分野を事例としたおことばとはいえ、このことは人文・自然・美術・理工、その他全ての内容の博物館に通じることで、博物館としての重要な調査研究機能への期待の大きいことを述べられたものでした。

博物館は、たしかに教育機関である。と同時に、博物館が博物館たるためには、展示に反映するとか教育普及活動の背景としてとかの理屈をつけるまでもなく、純粋に『研究機関』であらねばならない性格のものである。地域をフィールドとした基礎的な調査研究活動こそは、博物館の本来的使命で、この活動を核として、資料の収集・保存活動があり、展示その他の教育普及活動があるはずである。基盤となる調査研究活動が保証されず、建物ばかりが豪華、そして展示品は複製品のオンパレードでは、博物館もどきの登場と悪口をたたかれても仕方がない。『もどき』を脱皮するには、調査研究活動の原点を充実するのが近くて早道であることを、皇太子殿下のおことばから学ばせていただいたのでした。(S.O)

瑞浪陶磁資料館

▽ 509-61 瑞浪市明世町山野内  
 字大狭間1番地の6  
 TEL (0572) 67-2506

岐阜県の東濃といえば陶磁器の生産地として全国に知られたところ、そのルーツは遠く古代にまで遡るばかりです。社会の急激な進展が、この美濃焼の歴史を今に伝える貴重な歴史民俗資料を消滅・散逸させつつある現状の中で、昭和55年4月に開館したもの、瑞浪市化石博物館に隣接されています。多治見市、瑞浪市、土岐市、笠原町の三市一町による東濃西部広域行政事務処理組合の組織によって建設されたもので、その目的は「美濃焼の歴史民俗資料を大切に保存・展示、さらに調査研究することなど社会教育活動の一環を担い、先人の遺徳を学び後世に伝える。ことで、博物館機能をもった陶磁専門資料館ということです。展示の核として、焼物の歴史性、素材の化学性、作業過程での創造性を考えた内容が考慮されており、地域文化の向上に寄与する資料館、地域文化の過去と未来をつなぐ場であろうとの願いがこめられています。そのひとつのあらわれが、室内の展示だけでなく屋外展示として「土をつくる水車」があること、さらには連房式登窯が作られ、これは屋外展示であるだけでなく、実際にも使われるということです。友の会活動での体験学習会等を通して、

(瑞浪市民公園の中にある資料館全景)

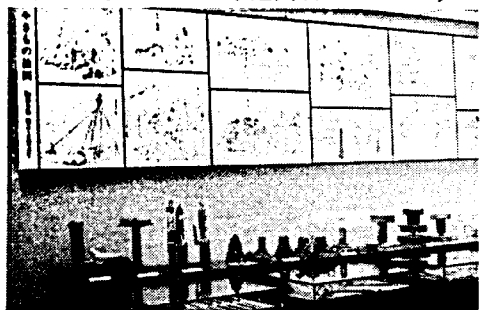


(友の会会員の夏季講座での作品)

会員の手によって作られた完成作品が、玄関ホールわきに展示されているのもほほえましく、地域へ向けての活発な働きかけ、活動の今後の充実が大いに期待されます。

展示品は周期的に展示替えされていますし、特別展開催となると、展示室全てが常設展示から特別展示へと替えられるということですから、一度ならず二度三度と訪れたいものです。古代・中世・桃山・江戸・そして明治大正昭和と、時代を追った陶磁器の展示が中心ですが、窯の模型があるなど、さらには絵付、成型、製造関係の小道具なども展示されており、単に陶磁器を陳列し、観賞の場にすぎない面に工夫がされています。洗練された単純さを思わせる雰囲気の中で、先人の知恵と努力をみつめ、明日への活力をみつけ出す場として、人々の教養の場、憩いの場、情操的安らぎの場となっています。多くの人々が、日常生活のいろいろな機会、場で、もっともっと活用すべき新しい文化施設といえます。休館日：月曜日、毎月月末。12月27日～1月4日間。開館9時～17時、入館料 中学生以下100円、その他200円。

(展示室のようす：小道具類のコーナー)



# 瑞浪陶磁資料館の行事活動

瑞浪陶磁資料館 次長 伊野重幸

はじめに——開館1年9ヶ月、手さぐりの活動をつづけてきた。その中で資料館は地域のために存在し、地域の人を介して地域の文化的レベルを向上させていくという努力に意義があること、館の活動の大きな目的は教育普及であり、それを行う人の資質が運営に大きな力となること、それを自身に云い聞かせながらの活動であった。まず、館の個性にあった活動の場を作ること、人が集まる母体を作ること、集まった人達が楽しさと意義とを感じてくれること、この三つを活動の基本にしてきた。

1. 個性ある活動の場を何に求めるか。

- (1) レクチャールーム——講座、小展示会
- (2) 体験学習の場作り——焼成できる窯作り  
実習室作り

2. 人が集まれる母体作り

- (1) 友の会を結成すること

3. 楽しさと意義を感じさせること

- (1) 講座、教室の開設——聞く学習、見る学習
- (2) 知る 学習、実際に体験する
- (3) 作る、行う 学習
- (4) 対話がある

## 実践してきた活動

1. 実際に焼成できる登窯の復元と実習室を建て、ロクロを配備し、体験学習の場を作って一般に開放した。
2. 有志を募り友の会を結成、現在会員110名、自主的活動を行っている。
3. 館と友の会は、登窯をたき、共同作業による人の和と集団の意義をみつけた。
4. 登窯焼成作品の展示即売会を行い、売上金の一部を慈善寄付した。
5. 大川古窯出土品の特別展を開く。これは、過去の窯と成品をとおして、地場産業の歴史と祖先の業跡を知ってもらおうことをねらった。



(登窯をたく友の会々員)

6. 夏季講座、連続して7回、時代毎に美濃の窯業史の学習を行い地域を知る手がかりを作った。

7. テラコッタ教室 親と子が共通の話題がもてることを創作粘土の焼物をとおして行い、家庭でいつもながめることができる思い出作品作りを行った。



(テラコッタ作り)



(親子で楽しむ野外教室)

8. ロクロ教室      ロクロによる陶器作りは友の会々員を先生にして、どろまみれの作業の中から、自分で作る喜びを味わった。



(ロクロ教室)

9. 粘土細工教室      教育委員会と連携して親子(低学年)で粘土遊びをしようと呼びかけ、資料館前の芝生を教室に72人が夏の光の下で楽しんだ。作品は、市民展会場に特別展示した。
10. 特別展「幕末・明治の窯業」を行い、陶器から磁器へのうつり変りと、美濃の明治の窯業人の力量と世界へ目を向けた努力の成果を展示し、陶磁器の過去をとおして、地域産業の現在と未来への思索を願った。



(講座 美濃焼の歴史をさぐる)

11. 土、釉、陶器の歴史、道具類を、展示してある資料を基に解説した「展示解説書」を作った。これは中学生程度を基本に学校の副読本に使用できる内容とした。

これからの活動      教育委員会、学校との連携、社会教育施設との連携を考えるとともに、籠城運営から打って出る姿勢を取るべきではな

いだろうか。館の運営のあるべき姿を話し合える場を設ける提案をしたい。

## 友の会のようすと所感

友の会は、現在110人、瑞浪市、土岐市、多治見市の人達で構成されていて、自主的な活動をとおして自個と地域の資質の向上につくすことを大きな目的にしている。

友の会の大きな行事は何んと云っても登窯の焼成で、会員の約半数が参加して行われる。参加する者は、5月頃から作品作り、山からの松丸太の運び出しと切って割る燃料割木作り等6ヶ月近い準備作業を行う。御婦人や高齢者は、お茶の準備やその人に合った仕事をして皆んなで参加し共同で窯をたく。製品を素焼して釉薬をぬる、窯詰をして三昼夜に渡る窯たきを会員の交替で行う。体験学習と云うには、少々重労働で苦勞の多い作業である。しかも、もう二回も登窯をたき、また来年もと云っている。この根性に私は感服する。

登窯をたく、それは、過去の人の労苦を知ることであり、一つの物がどのように成品化されるか、自らの体験をとおして知ること、教室学習では味わえない尊さがある。私達の地域の歴史と文化と産業を知る大きな手がかりとして友の会が行う体験を大切にしたいと思う。

又、共同作業は人と人との連帯を作り、地域に何んらかの形で良い影響を及ぼすと思う。焼成された成品は、展示会と慈善即売とを行い、売上金の一部を東濃3市1町の福祉のために寄附をした。地域社会に貢献するという友の会々員の気持ちこそ高く評価したい。

友の会の活動としては、登窯の焼成、作品展示会、古文書学習会、古陶磁学習会、釉薬学習会、ロクロ実習会、資料館の一般ロクロ講座の講師担当等があります。館事業の推進に欠くことのできない人的団体といえます。

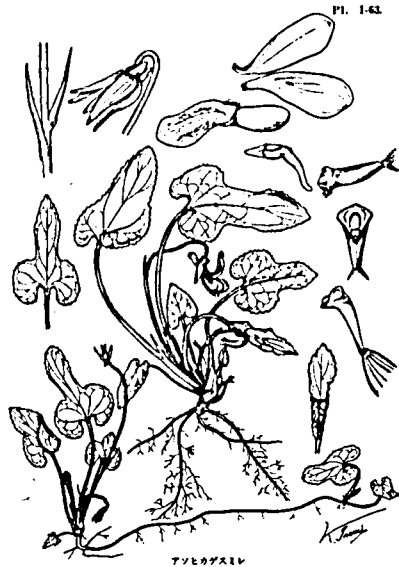
広島県植物図選第Ⅰ集の刊行に思う ……

## 博物館の文献出版活動の充実を…！

岐阜県博物館学芸員 小野木 三 郎

広島県植物図選第Ⅰ集が刊行された。隣県愛知県名古屋市在住の植物研究者井波一雄画者、(前川文夫東大名誉教授の推薦文では、あえて画家とは云わぬとあります)の手になる精密な植物画100種からなり、以後第Ⅱ集、Ⅲ集と、“我々はエネルギーのつきはてる最後まで筆を折る事はない。”と、本書の刊行母体広島の自然を守る会 三上幸三氏が述べておられる。標題は広島県…とあっても、全国的な普通種も収録され、これに、キビノヒトリシズカ、アソヒカゲスマレ、チョウセンヒメツゲ、ネコヤマヒゴタイ、と、日頃お目にかかれない植物の、まさに人間わざとは思えぬ精緻な植物分解写生図が収められている。手描き植物図の第一人者井波一雄氏の画筆の冴えは、賞讃のことばすらみつからないすばらしさで、寝食も忘れて植物図を描き続けておられる井波氏のいつも変わらない若々しき熱血漢には、頭がさがるばかりである。こうした図選、あるいは確かな植物図を集大成した地方植物誌の出版こそ、地域の博物館、とりわけ県立の総合博物館、あるいは郷土館や自然史系博物館の大切な、そしてきわめて重要な仕事であるはずなのに、広島県の民間組織の手でしか世に出ないところに、まだまだ日本の博物館界の、とりわけ自然史系や総合、あるいは郷土博物館の、事業活動の貧弱さ、底の浅さが露呈している。文献出版活動による教育普及が、博物館の大きな事業内容であることは、博物館法による定義や事業の条文を思い出すまでもなく明白なことである。ところが、どこも、公立の大規模博物館においてすら、この種の文献出版費は不足するばかり、館報や研究紀要も充分出版費がない実状で、博物館活動の中でも最も忘れられている分野ではないだろうか。

博物館が、珍品奇品の陳列場でなく、社会教



育機関として、地域の人々の学習の場となり、また、文化、学問の殿堂としての機能を発揮するためには、文献図書類の刊行とその頒布こそは、博物館活動の実績として世に残る大切な仕事といえる。

本誌№48, 49で紹介した明方村博物館の資料カードづくりの事例を思い浮べてほしい。国の有形重要民俗資料に指定された2,000余点の実物資料、これを精密にスケッチした実測図は、全くの素人の村人の協力によるもので、何度も何度も学習会を得てからの作品だけに、その一点一線にこめられた描き手の誠心が伝わるように、この絵そのものがすばらしい芸術品である。明方村民俗資料図集……とでも題して、出版されてしかるべき労作の数々である。こうした地味な中に価値高い仕事を、しかるべき出版物として世に残すことも、博物館の大きな任務だと思うのだが、どこも予算不足で悩むばかりである。

## 交流研究会内容構成の一私案

(愛知県) 財団法人 岩田洗心館 岩田 正 人

今更いうまでもなく、博物館という用語が現に一括している分野はあまりに多岐にわたっています。それがために、同一の社会的機能を果たすべくまとまることも、それだけ緊要の課題となっています。ですからこの三県交流研究会が一層整備されたものになっていくことが切望されるのですが、以下二三の思いつきを述べてみます。

これまでに参加いたしましたいくつかの研修会同様、今回もまた予定行事外の余暇における歓談においてこそ、活潑な討論がもたれたような印象をうけました。そのとき問題となったのが、本研究会をさらに研究会にふさわしく充実してゆくべきだ、ということでした。今回の研究発表はすべてよく準備されており、美術系博物館に奉職する筆者にも極めて興味深いものでしたが、一般的に言えば、他分野に関する研究発表を聴くことに切実な意義を見出しえない、という考え方もありうるのではないかとおもわれます。この疑問は、おそらく、発表内容が高度に専門化すればするほど強くなっていくでしょう。興味と理解力を有する者における満足度が強ければ強ほど聴取人数つまりは参加人数が少なくなる、といってもよいとおもいます。もちろん、他分野に対する無関心ということは、博物館に奉職する者とりわけ学芸員職にある者としては、やや残念なことです。というのも、専門分野以外に興味をもてない者が一般来館者の興味をひきだす、というのはおそらく一層困難なことでしょうから。今回参加された諸先生方も同様の御意見のようでしたが、館の方針として他分野との交流は不必要とされているところもあるかとおもわれますし、金子功先生のいわれる「来館する人々ではなく来館しない人々をいかに来館させるかが問題だ」という観点からすれば、発表内容があまりに限定された研

究の羅列になってしまうことは避けるべき、とおもわれます。

とはいえ、現状のままでよいのかといえば、誰しも一層の充実を望まれておられるようで、筆者もまたそのひとりとして、次に、交流研究会構成の一私案をのべてみます。

### ◎ 交流研究会構成の一私案

①博物館という機構一般に共通する問題についての研究発表——当番県協会による課題研究。

一般論としては既に博物館学というものもあり、なにを今更の感なきにしもあらずですが、例えば展示ひとつをとってみてもビデオ等の新技術導入がもつ具体的な成果と問題の研究など、各県博協が一年間乃至三年間の研究課題としてとりあげるべきことは無数にあるようにおもわれます。これが全博物館に共通する研究発表としていわばサクラの役を果たす。

②2乃至3本の特殊領域に関する研究発表——従来どおり(当番県からは出さなくてもよい)。

発表内容を少なくとも1週間以上前に参加予定館に配布してシンポジウム形式にするとか、発表時間を長くにとって講義化するとか、発表内容を同一課題に集中するとかして、内容の充実をはかる。但し、分科会形式は、会の性格からして避けるべきものとおもわれる。

③大きな議題を設定して自由討論をする。

以上の①と②③の一乃至双方の組合わせで会を構成する。

いかにも小手先でデッチアゲた政治的な案ですが、将来性を豊かに孕んでいるこの三県博物館協会交流研究会がさらに発展することを願って、思いつくまま述べてみました。

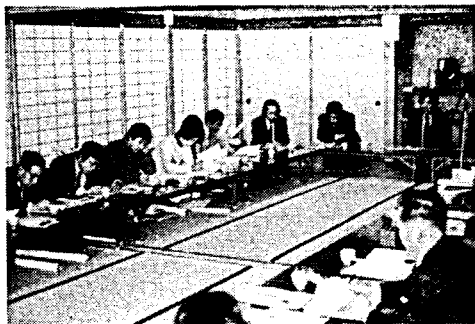
来年度は岐阜県博物館協会がすばらしく充実した交流研究会を御企画下さるものと楽しみにしております。

# 今後に期待することなど

(愛知県) 御園高原自然学習村 金子 功

三県博物館交流研究会が開かれるようになってもう何年かになる。愛知県博物館協会は以前より県外研修会と名付けた行事を行っており、毎年愛知県外の博物館の視察を行ってきた。たまたま三重県下の博物館の視察のために鳥羽市を訪れた際、三重県博物館協会の中村会長からの提案もあり、それ以来三重、愛知両県が交互に訪問し合って、見学と研究発表を含めた交歓会という形で定例化したものに、岐阜県の参加を得て、今日に至ったものである。

2日間の日程の第1日を研究発表、その夜に懇親会、第2日は施設見学というこの形は、当初はそれなりに意義があったと思う。しかしこ



のように儀礼と型式中心の会の進め方は三県交流研究会としての特色もなければ、その内容についても問題があるように思われる。この会は研究が主目的であって、交歓会のみが主目的でないことを今一度考えて見たい。これについては何回か機会をとらえては研究会の内容の充実について提案を繰返してきたが、愛知県博物館協会の内部でも積極的な同意を得られず結局は本年度の奥三河の会合も例年と大差のないものに終わってしまったことは私自身としてはいささか残念な次第である。

博物館における研究はいくつかある。その一つは専門分野における学術的研究であり、今一つは博物館活動のためのいわゆる博物館学的研究であろう。この二つが学芸職員の手による学

芸活動的研究とすれば、今一つ管理運営的な博物館の運営事務的なものがあるが。これらのうち専門分野の研究は、それぞれの館の専門的内容のちがいがあつたために必ずしも参加者全員の共感を得られる話題とはなりがたい。また管理運営的な面を採り上げてみても、館の規模、公私立等設置型態のちがいなどから、その間に共通の話題を求めることは困難であろう。

今までの三県交流研究会はそのすべてを対象とした内容であつたために、内容が薄くなつてきたことは止むを得ないことではあつたが、私の考えはこれを学芸職員が中心となつた、博物館学的な問題に焦点を絞り、日頃の研究成果を発表する場としたい。博物館学的研究といえば、資料の収集、保存、整理、展示及びこれ等を含めた教育活動であるが、そのうちのいずれかをその年度のテーマとして、今まで通り各県1名の発表者を選んで発表するか、あるいは全員参加が出来るように、各県1名の話題提供者を選び、パネルディスカッションの形などいかがであろう。

各県1名の発表者といっても、現状では一年間の研究成果を発表することは望むことが難しい。参加者全員に発言の機会を与えると同時に、会の盛り上りと、内容の充実を計るためにはパネルディスカッションの形など有効な方法と考えられる。

出来ることなら、年度はじめにその年の研究テーマ(中心話題)を決定しておいて、それぞれ各館はそのために資料を集めて活発な発言の出るよう準備して集まるようにしたい。学芸職員を中心として日頃の研究成果の発表と交流の場に成長してゆくことが、他の組織で計画しているこの種の研究会と一味異つたものとなるであろう。

岐阜県博物館協会の英断を期待したい。

# 花まつりインプレッションの記

(三重県) 御木本真珠島 松月清郎

その、今回の研修会の印象ということ言えばね、オソロしかったですね、花まつりが。だってね、こちらヨソ者でしょ、やっぱりどうしても異和感あるわけですよ、知らない土地の祭は。だいたい服装だって、ネクタイ締めてブレザーなんぞ着てるなんてどう考えても祭を見にゆく人のカッコじゃないしね。ま、これは実は開催案内書が悪いんです。というのは…懇親会終了後「月」において花まつり見学…とあったでしょう。この「月」がわからなかったんです。いろいろ考えた挙句、料亭か何かだろうってことにしてしまった。それならと言うので、ネクタイの着用<sup>ハベ・フォーティ</sup>に及んだわけです。こんなことだったらH・Dで来るのだったと悔んでもそれこそ後の花まつり。で、はなはだ不本意な格好で訪れたまつりの場所があれでしょ。なにやら

得体の知れないエネルギーに圧倒されたようでしばらくはぼう然としていましたね。身の置き場所がないっていうのかね、下手に動くとも関係者にどつかれそうでね、といてじっと見ているのも寒いやらけむいやら。外に出て焚火にあたっていると酒ビンは割れるわケンカははじまるわであぶなくてしょうがない。で、またそろ会場へ戻り、人にまぎれて見てたのですが、相も変わらずヨソ物が見物しているという感じが自分自身してしかたがないんです。別に人がそんな視線を発射していたのでもないし、第一、ヨソ物は僕だけじゃないしね、平気でいけばいいのだけど。踊りもしないのに感心したような表情の見物人をなにかとがめるようなところがこのまつりにはあるようですね。今度は是非、<sup>ハベ・フォーティ</sup>H・Dで、なに気ない顔してゆくつもりです。

## ≡ 県内ニュース ≡

### 岐博協セミナーの案内

#### 第5回セミナー

日時 昭和57年1月28日(木) 13時30分～16時  
会場 岐阜市中央公民館 岐阜市明德町6  
テーマ 仮称岐阜市歴史博物館展示基本計画案について、講師・岐阜市博物館建設専門委員会委員長野村忠夫岐阜大学教授、岐阜市教委社会教育課長 福田 信氏

#### 第6回セミナー (予定)

日時 昭和57年3月8日(月) 13時～16時  
会場 大垣市文化会館 大垣市室本町  
テーマ 「木因・芭蕉」について 講師郷土史研究家 大野国比古氏  
◎大垣市文化会館で開催中の「木因・芭蕉展」及び片野記念館(輪之内町)の見学を予定

### くすり博物館 日本の博物館8巻に収録

講談社から刊行中の豪華本「日本の博物館第8巻 科学のあゆみ」には、第8部からだと科学で、本協会会員館である内藤記念くすり博物館が大きく収録されています。美しく大きなカラー図版も多く、図版解説を古田恵子学芸員が執筆、ほかに青木允夫館長が「医療とくすりの発達史」を5ページにわたって解説執筆されています。これを機会に、完結間近い本全集の全巻購入をおすすめします。

### 編集後記

- ◎三県博協会交流研究会参加の方々から、今後への提言等をいただきました。次回は岐阜県が当番県です。
- ◎どうにか年4回の発行、つつがなく時間的な遅れもなく発行できましたが、さて内容となると…? 学芸活動の地道な実践内容をぜひ編集室までお寄せ下さい。(S.O)